

<p>上演 10</p> <p>2022年8月 1日(日) 5校目</p> <p>東北 ブロック (青森県)</p> <p>青森県立 青森中央 高等学校</p> <p>「俺とマリコと終わらない昼休み」</p>	<p>第46回全国高等学校総合文化祭演劇部門 第68回全国高等学校演劇大会</p> <p>講評文</p> <p>生徒講評委員会 担当委員</p> <p>(東京都) 工学院大学附属高等学校</p> <p>大石 未来</p>
--	--

昼休みの喧騒は、一発のミサイルによって悲鳴に変わる。戦争やいじめといった問題について考えさせられたのはもちろんだが、この作品から私たちが受け取ったメッセージは、「周りの人へ関心を持つことの大切さ」であった。

授業が終わり、思い思いに昼休みを過ごすところからこの物語は進んで行く。しかし、平穏な昼休みから一転、爆発の光が教室を包み、真っ赤な照明とともに教室の時間が戻る。主人公のガクトはこの不可解なタイムリープから脱するために奮起するのだが、いじめという大きな問題に直面してしまう。

このいじめという暴力に対してリコは核ミサイルを使っていて、教室内で戦争が起こっているのではないかという意見が出てきた。私の頭の上に落とせというセリフからは、リコにとってはこの場所こそが戦争地帯なのだからここに落とせと言っているように受け取った。逆に、ガクトは対話でタイムリープを解決しようとしており、この対比が戦争の解決法を提示しているのではないかという意見も出てきた。

リコやタイキが、「早くミサイル落ちろ」と言うシーンが印象に残った。世界を壊す力に頼るほど追い詰められている事実が観ている私たちに恐怖を感じさせた。また、ガクトは「このクラスが大好きだ！」と言っていたにも関わらず、「ミサイル落ちろ」と願うようになる。この変化にも胸が痛んだ。

タイムリープの演出に対して、講評委員からは賞賛の声が上がった。タイムリープは同じことの繰り返しで、どうしても飽きやすくなってしまいう印象を持っていたが、会話を切り取って変化を出したり、反対に役者の動きをきっちり揃えることで、観客に強いメッセージを与えることに成功していたように感じた。さらに、タイムリープ中の照明の色や音が心臓の音を表しているのではないか、という意見も出た。一瞬ですべてを葬り去る核ミサイルが、心すら消し飛ばしてしまうようにさえ感じさせられた。

劇冒頭、ガクトの衣装が周りとは異なり違和感を感じていたが、段々いじめられていた自分を守る鎧のような物に見えてきた。

逆にイマイのフードは殻のように感じた、という意見もあった。

緞帳が降りる直前、フードを脱いだイマイは自分の殻を破ることができたように思わされた。ラストのリコが手を掲げてチェンジザワールドが流れるシーンは、自分の世界を変えるというリコの強い意志が観客に届いた。

これから生きていく上で、ミサイルが飛んでくる可能性は0ではない。自分が気づいていないだけで、周りにいじめを受けている人がすぐ傍にいるかもしれない。そういったことをこの作品は私たちに強く訴えかけていた。知らないままでいたくないと心を突き動かされる素晴らしい舞台であった。